

同窓会雑感

副会長 川添 正 實 (法3回卒)

一、関西同窓会の生い立ち

関西同窓会は、昭和三〇年代前半に第一回生有田正三先輩の呼び掛けによって産声をあげた。

当時、住友信託銀行本店勤務であった先輩の設営で、本店のすぐ裏にある料亭「江戸安」に十数人が集い、若手であった私達を激励していただいたことを思い出す。

その後、先輩の名古屋転勤があり、私がそのお留守を預かったような恰好で招集が続けたが、まだ有志の集まりの域を出なかった。

昭和四〇年代に入り、卒業回数も重なり、関西在住者もかなりいるのではないが、ひとつ名簿でも作ってみようかと思いい立ち、昭和三九年発行の名簿を頼りに一人一人、電話と会社訪問を繰り返し、探し始めた最中に、毛織学部長、西嶋教授が来阪されるというニュースが入り、急遽ガリ版をきって案内状を発送し、昭和四一年六月一日大阪共済会館に約四〇名が集まり総会の形を取ることが出来た。そして、三九年卒の倭照君というファイトマンの巻頭言で寮歌「武夫原頭」に草萌えて」を浪速の地で大合唱し、一同大感激したのであった。

この巻頭言、寮歌大合唱のスタイルは現在も継承されている。

また、名簿は悪戦苦闘の末、四二年五月に約一〇〇名を掲載するタイプ印刷で仕上げ全員に配布した。正式な総会・名簿はこの時に始まったと思う。

その後、先輩が大阪に帰任され、有田会長名で毎年一〇月か一月に総会を開催し、大学から学部長・教授、地元から元教授(村崎・中

川・今井・真鍋の各先生)をお招きするなどして活動が続いた。この間五〇年の総会には、当時まだ珍しかったエチケットブラシを記念品として配ったこともあった。

二、関西同窓会現況

昭和五二年に有田先輩が再び栄転され、以後第一回生谷正道先輩(弁護士)に会長をお引き受け頂き今日に及んでいる。

関西はとにかく移動が激しく、在住者の消息追跡は大変な労力を要し、息切れ立往生の時に、昭和三七年卒の大久保武雄君という強力な助人が現れた。当時大和ハウス工業株式会社の総務部長であった彼は、持ち前の行動力と才覚で名簿を作り、会の運営を軌道に乗せ円滑化してくれた。昭和六二年からはすべて彼にバトンタッチし、以降谷会長・大久保事務局長の名コンビに若手中心の幹事の努力によって、毎年、年代の垣根を越えた楽しい雰囲気、総会が催されている。

昨年も去る一月一二日関電会館を会場に開催され、熊商大同窓会代表も招待して、恒例化したジャンケン大会・ビンゴゲームなどに、老い?も若きも入り交じったの大騒ぎの一時を楽しんだ。

三、同窓会の運営について

同窓会の運営であるが、一言で言って「大変な仕事」である。

一回生から数えて今日までの幅広い年代層と、出身県の異なる多人数をまとめることは並の神経では出来ない。事実、家庭も仕事もそっちのけにしての感があり、仕事人間・マイホーム人間から見れば「バカじゃなろうか」という地味な活動だ。しかし損得抜きだからこそ楽しい。年代を忘れて久し振りに逢う嬉しさ、笑顔を確かめ握手するだけのだが、たったそれだけの事を企画運営する事が楽しいという奇特な人間がこの世にはいるものである。(但し、好きであっても時間的、神経的にゆとりのない方が無理してやるものでない。いや、やってはいけない。)

私など一時は家族から「同窓会屋」!!どうしようもない総会屋と呆れられたものである。

四、本部への期待

そこで一言申し上げたい。

同窓会とはそのようなものゆえ片手間で出来るものではない。まして本部となると萬を超える人々の消息を掌握し、事業計画を樹て運営して行かねばならないし、資金的にも色々捻出することを考えなければならぬと思う。

名譽職はそれで良いとしても事務局は専門に当る人か、或は時間的・精神的・経済的に余裕のある人の手によって実行されなければ中途半端なものに終わってしまう。

本部と支部の結びつきは、そのような運営母体があつてこそ成り立つものであつて、単に名称だけの組織に終わらないようにしてほしいと思う。

過去四〇数年の歴史は、残念ながら物足りなさがあつたことは否めない。

とは言つても、同窓会の仕事は本来、実に楽しいもので、やり始めると途中で放り出すことの出来ない味のあるものだ。願わくば熊本市在住者の中からこのような「好き人間」が名乗りをあげ「核」となつて大活躍されることを期待する。

そして、「出来ない」という一言で諦めることなく、大学敷地内に同窓会館を建設し、OBがいつ訪れても暖かく迎えてくれるような「場」を造つて欲しい。萬を超えるOBが喜んで協力出来るような夢のある計画を樹てて欲しいと願うのだが、如何なものであろう。それもヒトケタのOBの命あるうちに……と思うのだが。